杉本苑子

鳥影の関

（下）

中公文庫 ©1986

鳥影の関（下）

一九八六年四月一〇日初版
一九九五年四月一〇日3版

著者 杉本苑子

発行者 嶋中行雄

本文・カバー印刷 三晃印刷
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替 〇〇一二〇―四―三四
ISBN4-12-201314-3
Printed in Japan

中公文庫

鳥影の関

下巻

杉本苑子著

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

下巻　目次

つゆくさ　7
報徳仕法　56
にしごりさん　110
密告　157
風花　211
呼び声　261
解説　神谷次郎　339

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

鳥影の関　下巻

つゆくさ

関所の番卒たちは、小静の声を聞きつけるとすぐ、通用門をあけてくれた。
「刻限はずれに参上し、申しわけありません」
挨拶して、ひとまず番所へ入ったが、水死人の件は、すでに川添番頭はじめ関役人一同の耳に達していたとみえて、
「ごくろうさま」
と、くちぐちに彼女はねぎらわれた。
黄麻の、涼しげな帷子にくつろいで、川添外記は夕餉をしたためていたらしい。竜岡目付も同様、単衣の着流しで自室から現れた。謹直な裃姿しか見ていない小静の目に、上司らの普段着は珍らしく、ことに竜岡要之助のそれには、ふと、目のやりばに窮するようなたじろぎすら覚えた。
（お城下のご自宅でも、うちとけた、このようななりでおられる竜岡さまか）
頭をかすめた想像に小静は羞恥し、どぎまぎ目を伏せた。
「お山詣ではいかがであったな？　一ッとき、まっ黒な雷雲が湧き起こって、ここらも白州の砂

利が浮き上るほどのどしゃ降りとなったが……」
「休みをとらせて頂き、ありがとうございました。おかげで参詣できました」
老番頭に小静は礼を述べ、ごく、かいつまんで山での夕立の激しさ、凄さを語り分けた。
「なんじゃ、錫杖に落雷したと？」
「興福院の雲水さんが一人、講中に混じって登山しましたので……」
「あぶないことであったなあ。その僧に怪我はなかったか？」
「遠くへ投げたせつな、落ちましたので、なにごともなくすみました」
「ちょうど同じころ、芦ノ湖では水死体が浮かんだ」
と、脇から竜岡目付が口をはさんだ。
「それがいささか胡乱な武家でな。小静どのもすでにお聞き及びであろうが、身分素性を証するものを何ひとつ所持しておらぬのだ」
「うけたまわりました。ただ一通、亡夫民部の名を記した所書だけが、持ち荷の中から出てきたとか……」
「心当りは？」
「いまのところ、皆目ございませぬ」
「遺骸と対面いたせば、どこの何びとか、わかるであろうか」
「たぶん、見当はつくはずでございます」
「われらもさように存じたゆえ、たまたま来合せていた権現社の常使に命じ、元箱根の宿老どもに事の顛末を知らせかたがた、小静どのを呼びにやらせたわけだ。ご足労だが、では一応、ご検分ねがおう」

「かしこまりました」
出て行きかける背について、
「おれたちが案内します」
急いで立ったのは、江見恭二郎、峰岸主馬の両番士だった。
外へ出てみると、あたりはすっかり暮れていた。
夜の関所は、扉を閉ざした大門がくろぐろと東西にそそり立ち、番所の小窓からわずかに灯が洩れるばかりで、中央の通路はことに暗い。
江戸口の向こうは『つかもと』など、掛け茶屋が四、五軒あるきりだし、新屋と呼ばれるその聚落をすぎると、あとは元箱根まで杉並木の街道がつづくだけだから、茶屋が店をとじ、葭簀を巻いてしまえば、門の外は墨汁を流したような闇だった。
そこへゆくと上方口の方角は、千人溜まりの空地をへだててなお、箱根宿の灯の色が、門扉の背後にぼうっと照り映えて見えるほど明るい。
絃歌のさんざめきまで、かすかに聞こえた。不夜城などと呼んでは少しおおげさかもしれないが、元箱根側が、はやくも寝しずまりでもしたような淋しさの底に、じっとり沈んでいるのに較べると、同じ時刻、箱根宿はこれからが、賑わいの汐先ででもあるかのような浮き立ちかただった。
「西門を出るときのために、わたくし、これを持参しました」
帯のあいだから、小静は焼印札を抜き出して、
「どなたにお改めいただけばよいのでしょう」
と江見恭二郎に見せた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そんなもの、持ってこなくてもいいのに……」
「でも、定番人さんがたの妻子でさえ、関所を通るのには手形がいりますわ」
「われわれは関役人ですよ。まして、水死人の検分はなかば、公用じゃありませんか。どちらの御門を通ろうと自由です」
「せめて、では、門番さんに札をお見せしましょう」
「いつも、そんな律儀なことをしているんですか？」
「いつもって……わたくしまだ、箱根宿へ一度もまいったことはありませんわ」
「えッ」
「お関所の西側へ出るのが、そもそも生まれてはじめてなんです」
「おどろいたなあ。その札を使って、ちょくちょく買物などに出かけているのかと思った。元箱根よりもはるかに箱根宿のほうが、店屋も品かずも揃っていますからね」
「自分の用たしなどに使うのは、なんとなくためらわれたものですから……」
「遠慮ぶかいんだなあ。こいつは下戸なので誘いませんがね」
と峰岸主馬を指さして、江見は笑った。
「拙者や早瀬、森下などは、ちょっとでも懐中にゆとりが生じると、小田原町、三島町へ飲みに出ますよ」
このまに門番の足軽が鍵を鳴らして、上方口の通用門を引きあけた。
「まあ、きれい」
眼前に展けた夜景の眩しさに、小静はつい知らず、歎声をあげてしまった。
星のきらめきが、頭上ちかぢかと迫って見えるほど闇の拡がりの濃い関所の内側……。そこに

立って見渡すと、箱根宿の遠望は別世界のようだった。
手ぐり寄せられるように小静は門を出た。
「どうです、にぎやかでしょう」
と江見恭二郎がつづき、峰岸主馬が最後に通用門をくぐった。
もともと無口ではあるけれど、峰岸はさっきから一言も喋らない。屈託ありげに眉を寄せている。そのくせ小静が水死人の面態を見とどけにゆくときまったとたん、江見一人でもよいはずの案内役を進んで買って出たのも、目立ちたがらない日ごろにしてはどことなく異様であった。
西門の先も千人溜まりになっていて、柵囲いのはずれに噴き井戸が造られていた。山から流れ出る清水を引き溜めて旅人の飲料に供したもので、切り石をたたんだ井桁の体裁は東門のそれとほとんど変らない。余水は道をつっ切って湖水にそそぎ、やはりここにも石橋がかかっている。
宿場町はこの橋のきわからはじまってい、つぎの石橋の手前に高札場と、時の鐘を吊した鐘楼があった。
「暗さに馴れた目が、とまどうほど明るうございますね。この町なら居酒屋や小料理屋などもたくさんあるでしょう」
「もっとも飲みに出るといったって、われわれの小遣です。めったに酒と対面するおりなどないけど、そぞろ歩きするだけでも退屈しのぎにはなりますよ。関所でヘボ将棋にひまをつぶすよりはね」
ただし、番頭や目付は番士らの夜歩きを好まない。
韮山の代官所は、支配地の三島町に出張り役所を設け、常時、手代を詰めさせているが、小田原町を支配する小田原藩は、その業務を箱根関所に在勤する藩士らに肩代りさせていた。

関役人としての仕事のほかに、つまり彼らは箱根宿小田原町の行政管理までを兼任させられているのである。

「安酒をくらって乱れなどしては、取締官として町民への示しがつかぬ。支払いは、たとえわずかでもそのつど済ませろ。借りをつくってはならぬし、たかり、おごりの強要などもってのほか。できれば店も、管轄ちがいの三島町へ行け」

と、川添番頭など、ひどく口やかましい。

たまの保養に、彼らがわざわざ芦ノ湯まで遠出するのも、湯治が目的であるのはもちろんだが、つねづね番士や足軽たちに、

「なるべくならば、近くで羽目をはずすな」

と言ってきかせていることへの、実証の意味もあるのであった。

水死した武士の遺体は、境杭のきわにひとまず引きあげられているという。

「その前に三島町の問屋場へ寄って、遺品を見てはどうですか」

江見恭二郎の言葉に、小静は無言でうなずいた。

はじめて目にする箱根宿の灯の色に一瞬、年甲斐もなく浮き立った気持が、江見のひとことで、いきなり現実に引きもどされたのだ。

峰岸主馬は、あいかわらず重くるしい表情のまま五、六歩あとから黙りこくってついてくる。

問屋場には名主、年寄、勘定役ら主だった宿役人のほとんどが詰めていて、

「お役目、ご大儀にぞんじます」

いっせいに会釈した。

「この婦人が天野小静どのだ。人見改め役として現在、箱根お関所に勤務しておられる」

と江見が引き合わせる。
「かねがね同役の石川お徳どのからお噂を聞かされております」
挨拶する宿役人の中に若い帳付がまじっていて、本陣石川家の、当主の倅だとみずから名乗った。
「祖母がいつもお世話さまになっています。並はずれて多弁な婆さま……。お関所でもさぞかし、おやかましうございましょう」
苦笑まじりに頭をかく。幾人もいるとか聞いていた石川お徳の、孫の一人にちがいない。
「とんでもない、こちらこそ大先輩のお徳さまに日ごろ何かとお教えいただき、おかげでどうやらお役を勤めております」
若者に辞儀を返しながら、小静は土間をよこぎって上り框に近づいた。帳場囲いの格子越しに、机や書類棚などが見える薄縁敷きの座敷である。
隅に置かれた品々をさししめして、
「ごらんくださいまし」
名主とみえる老人が説明した。
「女こどもや足弱な年寄りなどが用いる結わえつけの福草履……。ごらんの通りだいぶ傷んでおりますが、これが三島町の入江の岸にきちんと揃えてぬいであったのでございます」
「では、覚悟の入水と見てよろしいのですね」
「履物の形からすると、そうなります。なお、その上に、近くの芦の茂みの間から持ち荷とおぼしい布包みが出てまいりました」
ところどころ破れた青漆引きの道中合羽、籐編みの空の弁当行李、着替え二、三点、継ぎの当

った足袋など、どれもひどく貧しげな、古びた品ばかりである。
小静に、見おぼえなどあろうはずはなかったが、たった一つ弁当包みの中から出てきたという所書だけが、何としても奇怪だった。
「相州足柄下郡、元箱根、権現門前町、天野民部」
と克明な楷書で記されている。くい入るようにその文字へ目を当てた小静は、
「いかがかな？　所書の筆蹟、持ち物などに、お心当りはありますかな？」
町役たちの問いに、
「いいえ」
きっぱり言い切った。
「ございませぬ」
嘘ではない。よしんば水死した旅の武士が天野民部をつけ狙っていた相手であったにせよ、遺留品はごく、ありふれたものばかりだし、まして筆蹟からの身許の割り出しなど、小静に出来るわけはなかった。
「さようか」
さして期待してはいなかったらしい。三島町の町役らはあっさり、うなずくと、
「では、ご面倒ながら遺体をご検分ねがいましょうかな」
先に立って問屋場を出た。
「こちらでござる」
提灯のあかりにみちびかれるまま小静がおり立ったのは、街道すじから横路地づたいに折れて、ゆるい傾斜をだらだらと四、五十間ほどくだった芦ノ湖の岸である。

入江がかたちづくられ、いちめんに生い茂った芦原のところどころに猫の額ほどの水田が拓かれている。自家用に使うほんのわずかな米を、生業の片手間に収穫するつもりで、附近の町民がこつこつ作りあげた田んぼであろう。素人じみた不器用さでくねくねと曲りながら、それでも稲が植えられ、やや遅めの開花期を迎えかけているのが、水明かりの反射でぼんやり見える。

ふだんはこのあたり、夜など人が立ち入ることはほとんどない淋しい水辺にちがいない。今日はしかし、提灯や松明の火が幾つも揺れていた。水死体を囲んで、ヤジ馬が集まっているのだろう。

江見恭二郎が前に立ち、護衛でもする身構えで峰岸主馬が小静のわきに附き添いながら水ぎわへ近づいて行くと、

「きたきた」

人立ちの中から声があがった。石川お徳がいる。産婆のお紺ばあさんもいる。知り合いのよしみと成り行きへの興味から、彼女らは夕涼みがてら出て来たようだ。

一歩一歩、しっかり足を踏みしめているつもりなのに、小静の膝はがくがく慄えた。畦づたいの細道が暗く、ひどく歩きづらいせいもある。

「こんばんは小静さん。とんだかかわり合いになって、おきのどくだねえ」

さっそくお徳が話かけてくる。昼間見た浅間詣での装束をお紺も藍染めの浴衣に着かえ、やはり心配そうに小静に目礼を送ってきた。

水死人のなきがらには、それでもま新らしい菰がかけられ、だれの手でか、その上に樒の小さな束まで置かれてあった。

「あなたが天野民部どのとやらのおつれ合いですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com